

は か ま だ こ ず え
袴田 梢さん

育児サークル パオパオ代表



[袴田梢さん]
子どもとママたちが楽しめる居場所づくりを目指して、南陽協働センターを中心に活動中。現在のメンバーは親子で40人ほど。東京都出身、2児の母。

●浜松と東京と比べてみて分かること

浜松の印象は緑が多く、のんびりして子育てもしやすいところ。家の周りには田んぼがあり、少し離れたところに公園があり、大きな幼稚園もあるので環境的に恵まれていると思う。

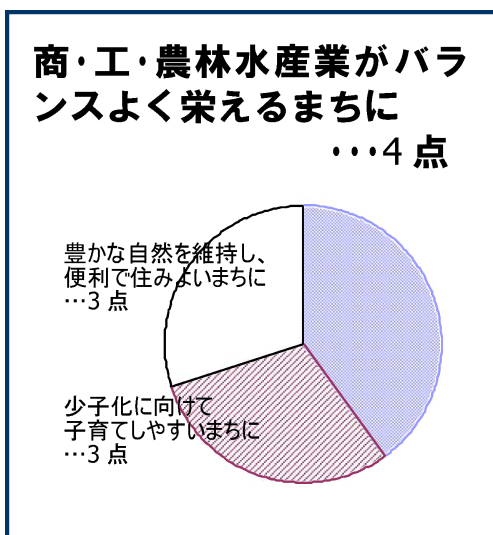
東京に比べて、浜松では電車もバスも限られていて、車がないとやはり不便に感じることもある。特に荷物が多い子育て中の家族には、車が便利に感じるもの。例えば、浜松駅周辺の駐車場を安価にしたり、浜松こども館の駐車場代を無料にしたりしてくれれば、利用しやすくなると思う。

●大きかったパオパオの存在

サークルに入って思ったのは意外と地元の方より、他からきた方が多いこと。地元出身ではない私にとって、子育てをしていく上でパオパオの存在は大きかった。誕生会やダンボール電車、風船で遊ぶイベントなどで皆さんと週に一度顔を合わせて、一緒に遊んで食事をして仲良くなれた。妊娠中には、サークルの方が気遣ってくれて、車で迎えに来てくれたこともあった。

●子どもとママの目線で楽しいイベントに

これからのパオパオの活動として、近くの消防署にお願いして、AED（自動体外式除細動器）を含めた心肺蘇生の講習会を取り入れたいと考えている。それから、土や砂が苦手な子になってほしくないの、泥まみれで遊ばせたい。農家に協力をお願いして、子どもたちと一緒に野菜を育てて、実際に食べてみて、食に関する知識を高める「食育」にも取り組んでいきたいと思う。今後とも、年齢に合わせて活動内容を変えながら、まず子どもたちが楽しみ、続いてママも楽しめるような、2つの目線でイベントを企画していきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●始めませんか？大家族化

核家族化が進んでいる中で、提案したいのは大家族化。核家族には、しがらみの無い生活や自由なイメージがある一方、親が子育ての悩みを抱え込み、大変になってしまうこともある。大家族には家族ぐるみで子育てを支え、助け合える良さがあり、子どもたちにとっても祖父母などと接することは良い経験になると思う。

私の家は6人家族。主人の実家に同居しているのでとても助かっている。皆さんも大家族化を始めませんか。

は せ が わ と も ひ こ
長谷川 智彦さん

一般社団法人天竜建設業協会 会長

●「山」は市民共有の財産！

浜松は、市域の過半が山地であり、浜松が誇る豊かな自然環境の魅力の一つとなっている。

また、市民生活の基盤をなす豊富な水資源や、数多くの特産物などは、天竜の森林によるところが大きい。現在、中山間地域の住民が、山林の管理を担っているが、高齢化や過疎化により、年々厳しくなっている。

何年か前、外国資本による山林買収が問題となった。また、今後も相続などで不在地主が増え、放置された状態が続くと、山が荒れ、元に戻すのが大変となる。下流の都市部にも様々な影響が懸念されるため、山林を市民全体の財産と位置づけ、管理者となる中山間地域の住民の活動を、市として支援してはどうか。



●地域の頭脳を活用したインフラマネジメントを！

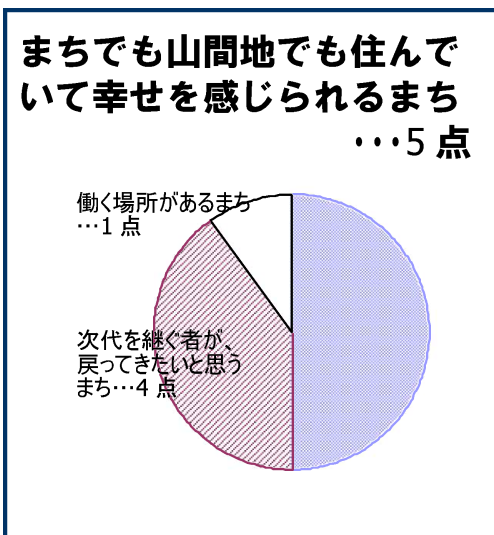
天竜区では橋梁などインフラの老朽化に関連したニュースが相次いでいる。近年、台風や集中豪雨など自然の脅威にさらされており、また、三連動地震など、自然災害への対応が市民にとって最重要課題となっている。今後、30年を視野に入れ、インフラをどのように維持更新し、災害に対応していくかを、考え直すべきと考える。

インフラは、地形や立地場所などの特徴を経験的、体感的に理解した上で管理することが最も効果的であり、特に自然災害時は、これを理解する地域の業者と行政が迅速に連携し対応することで、被害を最小限に食い止められる。ぜひ、そうした危機管理の視点も加味しつつ、インフラマネジメントに地域の頭脳を活用することを考えてほしい。

●多彩なライフスタイルを！

若者たちにとって、利便性、効率性を重視した都会での生活でなく、山や川に囲まれた自然の中で子育てするような、田舎暮らしへのあこがれは、多いのではないかと。浜松は、都市部から中山間地域を有し、豊かな自然環境と多様性を有しているのが特徴だが、近年、効率化を進める中で、地域コミュニティの核となる学校や行政窓口がどんどん減ってきている。核を失うと、そのコミュニティは縮小、そして消滅へと推移してしまう。

次代を継ぐ若者たちが、望む多彩なライフスタイルを送ることができるよう、中山間地域への定住誘導策をはじめ、大きな視野を持って、まちづくりを進めてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

は た の ち づ こ 波多野 千津子さん

浜松北地域まちづくり協議会会長
北区女性団体連絡協議会副会長

●まちづくりに女性の声を

北区は、3つの旧自治体と旧浜松市の一部地域でできた行政区。合併当初は、それぞれの地域性にギャップを感じたが、区協議会や北区女性団体連絡協議会などでの話し合いを通じ、ずいぶんと溝が埋まった印象がある。

北区女性団体連絡協議会は、女性の意見をまちづくりに反映させるために立ち上げた。旧自治体の垣根を越えて集まった女性たちが、様々な地域課題に取り組んでいる。



【波多野千津子さん】
北区の小学生 688 名による、同一会場・最
多人数の鍵盤ハーモニカ同時演奏のギネス
世界記録成立に尽力した。

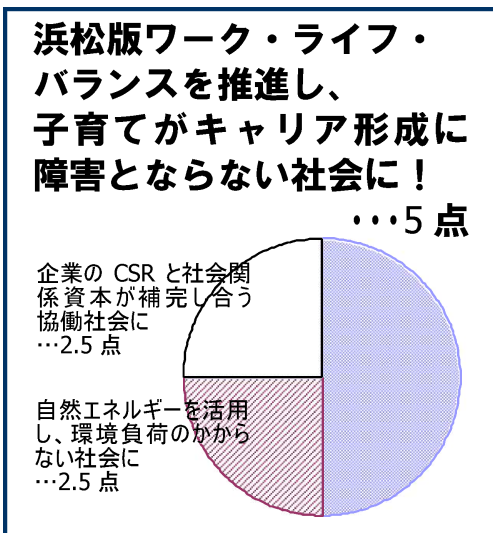
●子育て支援を充実させ、男性も女性も働きやすい社会に

今後、人口が減少していく中で、女性の力は社会にとって不可欠なもの。男性も女性も、子育てがキャリア形成の障害にならないことがますます重要になってくる。

しかし、現状では、育児休暇を取得しにくく、育児退職する女性が多い。一度退職すると正社員への復帰が難しく、能力のある女性がパート・アルバイトに回っている。また、育児休暇からの復帰後、子どもを保育園や放課後児童会に預けられず困っている女性も多い。

女性が育児休暇を取得しやすい環境を整えるとともに、男性の育児休暇取得を促進したい。夫と妻が交互に休暇を取るのも良い。また、子育て世代が安心して働けるよう、待機児童の解消や放課後児童会の定員拡充、病児保育施設の増加などに取り組んでいかなければいけない。行政には、現場の声を反映する施策を行ってほしい。

企業の取り組みにも期待したい。浜松でも、特色ある取り組みを行う中小企業が増えてきたが、まだまだこれから。企業が自信を持って、子育て支援や、オリジナルのワーク・ライフ・バランスを打ち出せば、優秀な人材が集まると思う。例えば、企業内保育所の設置。一社では不可能でも、複数社の合同でなら設置できるかもしれない。社員のキャリアを継続していくことは、会社にとっても得になるはず。



【浜松市への期待度グラフ】

●希望の持てる農業で後継者育成を

浜松は農業都市でもあるが、耕作放棄地が増えた印象。先進国では人口が減少していくが、中進国、途上国では今後も増加する。輸入品に頼っている、食糧が得られなくなる可能性もある。6次産業化など、希望の持てる農業経営を広め、後継者を育てていく必要があると思う。

はだの みさこ 羽田野 美沙子さん

子育てサークル 元ままびりおん代表



【羽田野美沙子さん】

職場復帰に伴い、「ままびりおん」を一時終了させ、新たな展開を模索中。1児の母。豊橋市出身。

●「ままみりおん」から「ままびりおん」へ

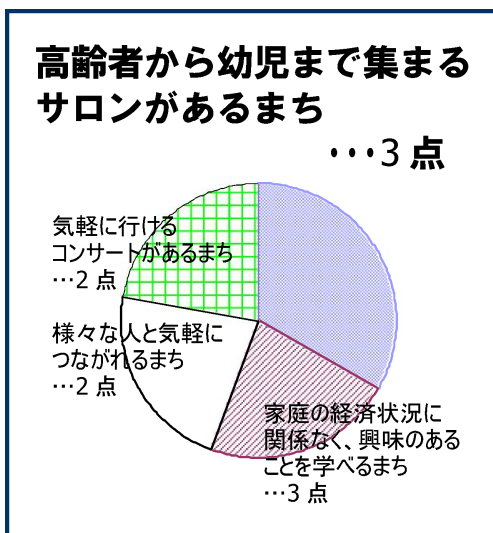
当初「ままみりおん」の名称でブログを書き始めたら、多くの子育て家族が読んでくれた。ママたちが集まれば、もっとたくさんことができると思い、「ままびりおん」に桁を上げて、サークルを立ち上げた。子育てママの活動を中心として、子どもと一緒にお寺での法話とベビーマッサージ、パン・うどんづくりなど、家族で楽しめる活動を進めてきた。私の職場復帰に伴いサークルが一時終了となるけれど、活動を通じて知り合った仲間とのつながりを大切にして、新たな形態を模索したい。具体的には、月1回ではなく、季節ごとに集えるようなものも考えていきたい。

●明日が楽しみになるような気持ちを子どもたちへ

将来、地域に小さなサークルがたくさんできて、子育て世代だけでなくいろいろな世代の人と交流できるような場所ができればいいと思う。大人たちがまず楽しみ、おもしろい大人の姿を子どもたちに見せるような活動は、子どもたちもきっと楽しめるはず。常に子どもたちには「明日が楽しみになるような気持ち」を持ってもらいたいと願っている。

●できたらいいな！人材のマッチングシステム

市外からの転入した子育て世帯や高齢者世帯が、地域から孤立することもあると考える。住んでいる地域に根差し、人をつなぐシステムづくりが必要ではないだろうか。子育て中の母親、定年退職者、専業主婦、会社員などの中で、夕方だけなら、休日だけなら、子どもが一緒でも良いなら、持っている能力を提供できる人も数多くいる。その人たちが気軽に活躍できて、地域の人の要望に応えられる人材マッチングシステムがあったら素敵だと思う。



【浜松市への期待度グラフ】

●「待つこと」と「交わること」

子育てで大切なことは「待つこと」。大人の都合で急がしたり、決め付けたりして、できる子をできない子にする必要はないと思う。大人は子どもの成長を見届けるため、待つことが大切ではないだろうか。

現在の子育て支援は、子育て世代だけが集まること一般的。地域の皆で声を掛け合い多世代が交流し、交わることで子育てができるようなまちになってほしい。そのために誰でも集えるサロンのような場所の創設と定期的なイベントの開催が必要だと考える。

ば ば 馬場 さかゑさん

職場研修講師

●社会人が Levelup できるまちづくり！

社会人教育に携わっているが、東京では人気の高い講師の研修であっても、浜松では反応が今ひとつということが多く、もったいないと感じることがある。

浜松の経済を活性化するためには、働く人たちの態度や、モチベーションをより高めることが、何より重要と考える。

浜松は、東京や名古屋から近く、交通の便が良いので、例えば、アクトを活用し、全国的にも人気のある講師を集め、継続（常設）的に高いレベルの講習を開催するなど、社会人教育のメッカとなる仕掛けを打ってみてはどうか。

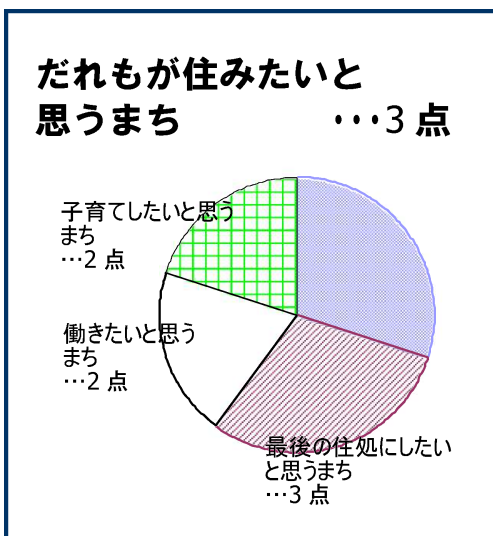


●びっくりするほどの「感動」を！

浜松は、風光明媚で温暖な自然環境等の魅力を持つ。しかし、駅前やまちなかを見ると、統一したまちづくりの理念が感じられず、市外からのお客様にとって特徴に乏しいまちとなっている。

企業は、単なるスローガンに留まらず、社員全体が一つの理念を共有し、全社一丸となって実践することで、顧客に満足と感動を与えるサービスを提供している。まちづくりも同じ。欧州では、まちの住民が全員参加し、世界中の人があこがれる統一感のあるまちづくりの事例をよく見る。日本では、情緒ある温泉風情を味わえる黒川村が思いつく。

浜松も、地域の魅力を上手にプロデュースし、住む人には「郷土の誇り」を、訪れる人には、「驚き」・「感動」そして「元気」を与えられるようなまちを、オール浜松で築いてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●市民の味方で信頼できる行政の実現を！

役所には、前例踏襲・杓子定規という批判がある。何かする際、壁となる固定観念があるのかもしれない。

以前、スウェーデンに住んでいたとき、福祉の相談で、職員ごとに対応が全く異なることに驚かされた。はじめは、その違いにストレスを感じたが、実は、現場の職員に広範な権限が与えられていて、市民一人ひとりの状況に応じて常識的に判断し、制度も柔軟に変えることができると聞き、納得し感動した。

まずは、市民に向き合い応援する姿勢で、行政を進め、それをわかりやすく示すことが大切ではないか。そして、市民との間に、信頼感が生まれ、皆が共感して活動するまちとなればすばらしい。

浜松開誠館高等学校生徒会さん

かよう 直貴さん（生徒会長） 井上 澄陽さん（書記長）
 いたう 健吾さん（ホームルーム委員長） なかもと 梨花さん（書記）

●浜松市のイメージ

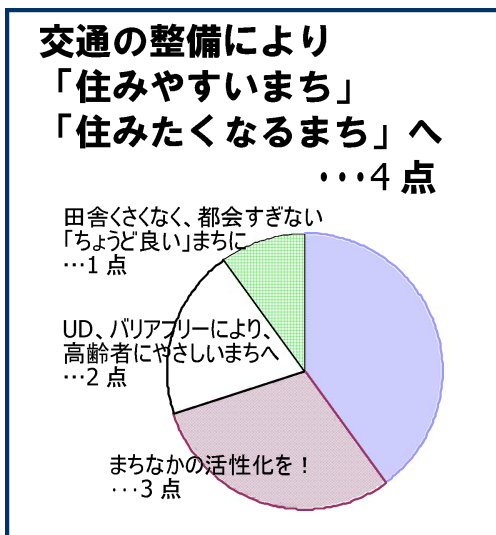
- 気候が温暖で、自然災害も少ない印象。自然環境に恵まれている。
- 「音楽のまち」と言われるように、ピアノを通じて国内外のいろいろな都市とのつながりがある。
- 音楽イベントも多い。
- 芸術文化は音楽だけではない。浜松市美術館は非常に良い展示をしている。しかし、手狭なこと、PRが足りないことで、人が集まりづらい現状はもっていない。
- ヤマハやスズキ等の有名企業の本社も有し、「ものづくりのまち」として工業が発達した都市である。
- 新幹線や東名高速道路など、関東・中京・関西を結ぶ交通基盤が整っている。
- 他市の人にとって、スズキなどの大企業は有名だが、浜松自体の認知度はあまり高くない。政令指定都市であるにも関わらず「準都会」と言われる。
- 大型ショッピングモールが郊外にできたからか、まちなかに活気がない。



【浜松開誠館高等学校生徒会のみなさん】
 3年生と2年生で構成する生徒会。生徒会長の加陽さん(写真右から2番目)を中心に結束力があり、仲が良い印象を受けた。

●交通の整備により「住みやすいまち」「住みたくなるまち」へ

- 市内交通については、駅までのバス路線が充実している。しかし、例えば大型ショッピングモールなど、郊外の拠点と拠点を結ぶ移動手段がない。
- 地域の拠点に対して環状にバス路線が形成され、各々を結ぶように交通ネットワークが組まれると便利ではないか。
- 自転車利用者にとっても住みやすいまちになってほしい。今は歩道と自動車道しかなく、走りづらい。
- お金が掛かっても、本当に必要なものは整備すべきだ。
- 自転車通学や電車通学などいろいろあるが、ルールやマナーを守ると共に、地域の人たちに挨拶を交わし、気持ちよく楽しく過ごせるようなまちにしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●高齢者にやさしいまちづくりを

- ユニバーサルデザインに配慮した、医療・福祉の充実したまちになってほしい。
- 福祉対策も重要だ。今、高齢者の孤独死が問題になっていることから、寄り合いなど、高齢者が集まれる場所をつくる必要がある。
- 地域の拠点にフリースペースを増やしたらどうか。高齢者を始め、みんなにとっての憩いの場として活用でき、世代間の交流にもつながる。
- 私たち若い世代が、高齢者にいたわりや思いやりの心を持って接するまちづくりをしていきたい。

浜松市立高等学校生徒会さん

生徒会長 鈴木 亮祐さん
書記長 黒木 光さん

●浜松市のイメージ

- 楽器産業や自動車・オートバイ産業、繊維産業などが盛ん。東名・新東名高速道路などの大動脈が東西に通っていることが産業発達の好条件だ。
- 浜名湖や遠州灘、中田島砂丘、天竜川、赤石山脈など、自然に取り囲まれ豊かだ。都市部も山間部もあり、日本の縮図だと学んだことがある。
- 静岡県は健康寿命日本一と言われるが、浜松市も気候が温暖でみかんや鰻といった栄養豊富な特産品もあってか、市民がとても健康的だと思う。

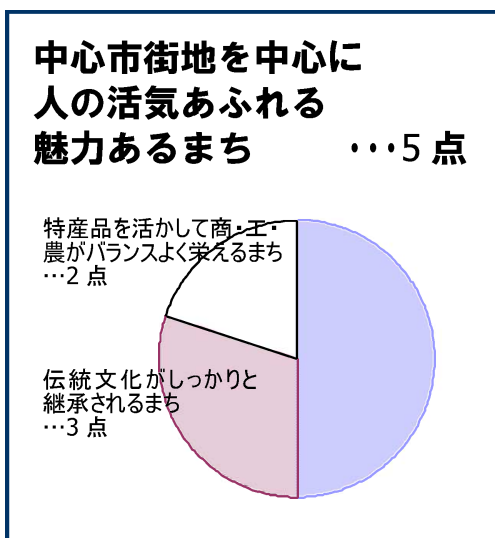


【鈴木亮祐さん、黒木光さん】
体育大会の準備のため、夏休みに入っても生徒会として精力的に活動中。

●活気があふれ魅力あるまちになるために

- 静岡市から浜松市に移ってこられた先生が「静岡市のまちなかは商店街を歩いて楽しみ、大型デパートにいける。郊外型の浜松市とは大きく違う」とおっしゃっていた。
- 京都に旅行に行った時、駅ビルには様々な店舗が入っており、見て回るだけで楽しかった。浜松駅周辺も商業施設が充実すると、人が集まり活気あふれる魅力あるまちになると思う。
- 関西出身の塾の先生に浜松のイメージを聞いたことがある。答えは「新幹線で通り過ぎるまち」だった。企業の誘致やデパートの充実により、新幹線を降りる「目的地」としてのまちになってほしい。
- 県外から誘客するには観光地としてのテーマパークが重要だ。フルーツパークは時の栖の運営によって人気が出てきている。三重県の「なばなの里」や御殿場市の「時の栖」はイルミネーションで成功している。ぜひフルーツパークもそれらに続いてほしい。
- 歴史的遺産を活かした観光産業にも力を入れるべきだ。例えば浜松城。徳川家康の過ごした出世城と言うことだが、坂本龍馬のようなキラキラしたイメージはなく、地味な印象。

大河ドラマなど、全国で取り上げられるとイメージも変わり、脚光を浴びるのではないかな。



【浜松市への期待度グラフ】

●地域と密接な関係をつくっていききたい

- 市立高校生徒会は、ボランティア活動の一つとして地元の広沢自治会と協力し、カーブミラーの清掃をした。また、選挙の投票所の手伝いにも参加した生徒もいる。
- 地域や市の事業に対して、協力する意欲がある生徒は多いはずだ。
- 市立ということもあり、生徒会として、今後、市の事業に積極的に関わっていききたい。そして、他の高校の先駆けとなり、さらに、周辺の県立・私立高校などとも連携していけたら良い。

はやし たくじ
林 卓司さん

一般社団法人浜松市医師会副会長（たく整形外科医院院長）

●患者のニーズに応えられるよう尽力

浜松市に、たく整形外科医院を開業して 17 年。常に患者に寄り添い、ニーズに応えられるような診療を心がけている。また、医療スタッフ全員が力を合わせ「心の通い合う医療」、「信頼できる医療」を提供し、地域の皆様から親しまれる医院、安心して受診できる医院を目指している。

今後、医学の分野では、遺伝子診断・治療や IPS 細胞に代表される再生医療が発達すると思われるが、クローン人間の誕生が危惧されるなど、より一層、生命倫理と調和した医学・科学技術の発展が望まれる。



【林卓司さん】
趣味は、大学時代から続けている登山。岩山や冬山にも挑戦し、10 年ほど前からはじめた百名山も残りあと 4 つ。マッターホルンやモンブランにも登頂経験あり。

●大らかで開放的な市民気質！

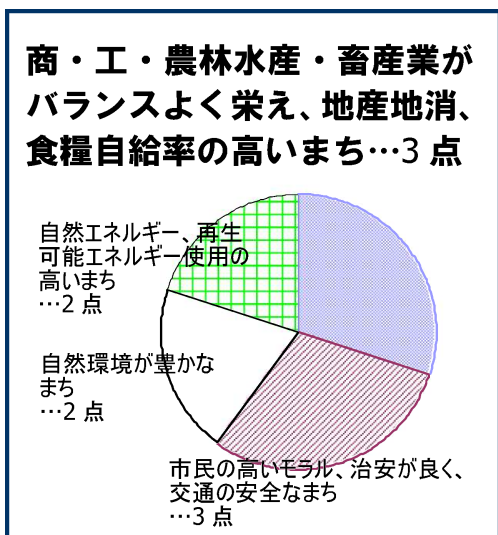
大阪から引っ越して来て感じるののは、人口規模が適当であり、大都市に見られるような弊害が少ないということ。浜松市民は大らかで開放的な気質を持っており、他地域から移住してきた人を、受け入れてくれる度量がある。転勤や進学で浜松に来て、そのまま住み続ける人が多いのではないかと。また、東西南北を豊かな自然環境に恵まれ、気候温暖で地の利を活かした産業がよく発達している。

しかし同じ政令市の静岡市と比較して、街並みに伝統や文化の香りが少なく、雑多な印象も受ける。これは静岡市が商業のまちとして発展し、浜松市は製造業のまちとして発展してきた歴史があるのだろう。それぞれの特色を感じる。

●大規模災害に備えた医療体制の充実

診察をしていると、ひとり暮らしで、健康面に不安を感じる高齢者が増えていると感じる。進展する高齢化、人口減少社会において、ひとり暮らし世帯も増加し、普段の買い物など生活面でのサポート体制が今後より一層重要になるだろう。

浜松市は、他の政令市に比べ、人口比で総合病院が多い。救急医療に関しても、症状に応じて医療機関が 3 段階に分かれて対応し、それぞれがネットワーク化されている。これは「浜松方式」と呼ばれ、救急医療体制が全国に先駆けて整備されるなど、充実した医療体制がある。現在、想定される大地震等大規模災害時の医療体制に対し、医師会としても整備を進めているが、より実効性のあるものとするため、行政と強力でタッグを組んで、万全の体制を整えられるようにしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

はらだ ひろこ
原田 博子さん

NPO 法人はままつ子育てネットワークぴっぴ 理事長

●流行に乗らずにもっと特色を出して

浜松の独自性とはいったい何か。観光、中心市街地活性化など、どこの都市も似たような状態であり、他からの受け売りや流行に乗って、同じようなことをしていないだろうか。もっともっと、特色を打ち出し、PR をしていく必要性を感じる。

例えば、ものづくりでは、楽器や自動車産業などに関連した中小企業が多く、優れた職人気質があると思う。それを活かしたものづくりのマイスター大学をつくり、浜松に全国から人を集めて、育成してはどうか。

●女性の働きやすい環境づくりを

浜松は、温暖な気候に恵まれ、日照時間が長い。それを活かした太陽光発電や風力発電など、地域資源を活かした新(再生可能)エネルギー分野で雇用の場を増やすことが重要だと考える。今後の人口減少が明らかであるため、新しい雇用の場に女性が労働参入しやすい環境をつくっていくことが重要となる。女性の働きやすい環境づくりには、企業や団体等のトップの意識改革が必要だと考えている。

●親の収入で子どもの将来が変わるなんて

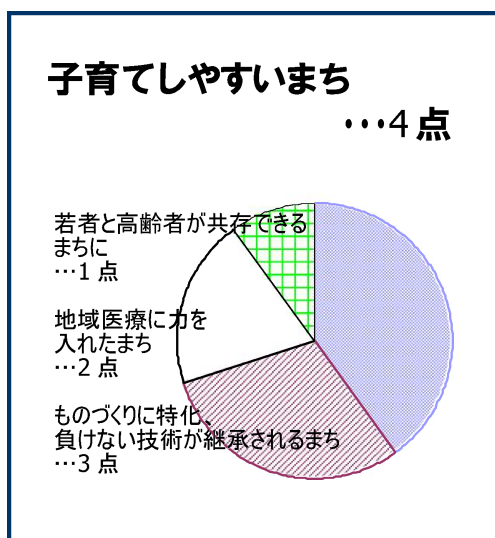
子どもの教育資金では、乳幼児期ではなく義務教育より後に多く掛かる。このため、勉強したい子どもには、家庭環境に関わらず奨学金制度などで資金を賄う対策が必要である。親の収入で子どもの将来が変わるなんておかしい。特に子どもの貧困対策を重要視してほしい。

もし、子どもたちの環境が改善され、子育ての地域連携や情報交流などの NPO の使命が達成されたとしたら、私たちの活動は必要がなくなるはず。そのときまで活動を続けていきたい。



【原田博子さん】

子育て関連団体、個人の相互の情報交流のサポート。団体・行政・企業・学校などの連携を推進。



【浜松市への期待度グラフ】

●育てたい、考える力を

最近では、子育て家庭の防災対策の講演やワークショップの依頼が県内外からある。防災訓練は、地域単位で行うことが一般的である。しかし、子育て中の家庭では、どうやって子どもたちを守るか、対応の優先順位が何かからかなど、防災対策の課題は多い。とにかく、防災と聞くと話が硬くなりがちなので、楽しみながら理解を深めていくことが大切である。私たちが子育て講座や防災ワークショップなどを運営する上で一貫しているのは、すべてしてあげないこと。行政も手を出し過ぎてはいけない。せつかくの考える力が育たなくなってしまうから。

●地域の子どもたちの故郷を守る

地域の子どもたちが「故郷レス」にならないように。北遠地域の町がゴーストタウンにならないように活動している。バランスの取れた住みよい地域に緑豊かな山々は必要。少しでも長持ちさせたい。そんな思いでNPOの活動を続けている。

私たちのNPOでは、子育てや高齢者の支援、耕作放棄地や空き家対策などの地域課題に、分野を問わず取り組んでいる。利用者には対価をいただき、会員には報酬を支給する。事業を長く続けていくために、ボランティアではなくソーシャルビジネスとしての仕組みが必要だと考える。



[平澤文江さん]
農林業やITの知識を持つ仲間とともに、特産品のネット販売など、水窪の魅力を都市部に売り込んでいる。

●「生きる知恵」が途絶えないように

まちなかの子どもたちを対象に講座を開いた際、火を見たことのない子、マッチを使えない子が大量に驚いた。オール電化の家に住んでいて、日常生活で火を見ないようだ。生活の基本を知らない子どもたちが30年後の社会を動かすことに、不安を感じる。

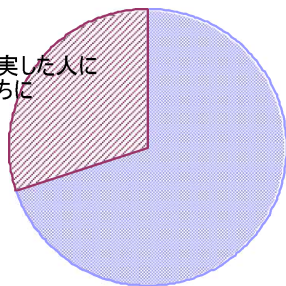
水窪では、子どもの数が減少し、1学年10人前後になってしまった。子や孫と同居している高齢者は、一握りの幸運な人だけ。「自分の知識や経験を次の世代に伝える」という役割を失ってしまった人が多い。そんな高齢者と子どもたちの出会いの場をつくりたい。火を見たことのないまちの子に、山のおじいちゃん、おばあちゃんが火の使い方を教える。教えてくれた高齢者には、きちんと報酬を支払う。浜松市全体で、生きる知恵を継承していかなければいけないと考える。

特産品である枳の実がどの山にあるかといった知識や、枳もちをつくる加工技術は、水窪でも70歳以下の人ほとんど知らない。今、高齢者の持つ知識や経験を教わらなければ、文化が途絶えてしまうという危機感を感じている。「田舎に住みたい」「自然に囲まれた環境で働きたい」と考える都会の人は多く、実際に移住したり、会社を移転したりするケースもある。彼らが、山や川、特産品を守る担い手になってくれることに期待している。

**新しい時代の理想の
ワーク・ライフ・バランスが
実現できるまちに！**

…7点

福祉が充実した人に
やさしいまちに
…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●理想のワーク・ライフ・バランスを実現！

行政には、高齢者や子どもなど、弱い立場の人を助けることに力を入れてほしい。

最近、人の生き方・働き方の意識が変化していると感じる。浜松市は、働く場所と住環境が整っていて、休日に家族で遊びに行ける山や海、公園がある。理想のワーク・ライフ・バランスを実現できる要素がそろった理想的な地域だ。この恵まれた環境を利用し、みんなが人間らしく生きていける社会になってほしい。

ほうだい ひろあき
蓬台 浩明さん

ドロフィーズ 代表取締役社長

● **都会の素敵なライフスタイルを楽しむ為の生活をしたい大人（退職後）が浜松を選びたくなる生活を発信する街に！**

世界を見れば、「マテリアル」から「IT、金融」、そして今後は「人の心」がグローバル時代における成長のキーワードとなる。超高齢社会となった日本においては、社会の中心となる高齢者の心をいかにつかむかが一つの鍵となるのではないかと。とりわけ、都市部に居住する団塊世代など、多様な価値観と高度の文化を持ち、都会のお洒落な生活を知る高齢者は、これからの日本、そして世界をリードする価値を生み出す存在である。

浜松は温暖な気候、医療の充実や交通の要衝といった魅力を既に持っていることで、更にインパクトある移住支援制度を設けることで、退職金や年金等と合わせ、十分に豊かな生活が送れるような魅力的なライフスタイルを提示し、様々な人材が全国、ひいては全世界から集まるようなまちづくりを目指してはどうか。

● **「カッコよくてオシャレ」なまち・浜松をまるごとブランディング！**

浜松は、自然環境に恵まれ、音楽文化も根付くなど多くの魅力に溢れている。しかし、裏を返せば、魅力がバラバラなため、まちのイメージがぼやけているとも言える。ボストンやロサンゼルスなどは、都市自体に憧れるブランドイメージがあり、世界中から人を集めている。

30年先を見据えた、行政のマスタープランをつくるのであれば、ジャズやバイクなど、浜松の持つ多くの魅力が、「カッコいい」というキーワードで結ばれ、世界の人々を魅了し続けられるようなまちであってほしい。

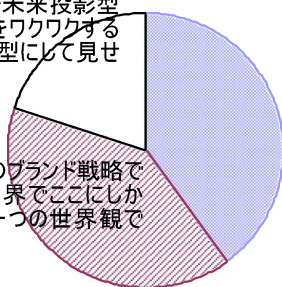
各分野の第1線で活躍する人々がわくわくするような「とんがった」メッセージを与えられるセンスを持つ、民間のブランド戦略家をまとめ役に起用してはどうか。



エコ、アートなど、一貫した浜松イメージをつくり、世界から人を集める…4点

「ものづくり」を未来投影型で人の生活をワクワクするスタイル提案型に見せていく
…2点

世界視点でのブランド戦略で発信をし、世界でここにしかない価値を一つの世界観でまとめる
…4点



【浜松市への期待度グラフ】

● **世界最高のホスピタリティを浜松から！**

マテリアル、ITと数10年単位で世界の価値観が動いてきた。

そして、これからの30年は、ロボットで代用できない「もてなし」の心の時代になるだろう。

今、日本流のサービスやもてなしが、世界で評価されつつあるが、よそ者であっても頑張る人を応援するというオープンな浜松の気質は、新たな発展のポテンシャルとなるものではないか。

浜松の個性を一つにして、市民全体でもてなしのまちづくりを進め、外部からの様々な人を集める原動力としてはどうか。

ほりうち ひでのり
堀内 秀哲さん

一級建築士／中野町を考える会事務局長
東区協議会委員

●チャレンジ精神と起業家気質が最大の強み

浜松市の最大の強みは「ものづくり」の盛んな風土、また、その背景にあるチャレンジ精神と起業家気質である。結果、これまで製造業や光産業をはじめとした世界的企業がたくさん輩出した。静岡県建築士会に所属し、県内都市の人と関わることがあるが、総じて西部地区は新たな取り組みに前向きである。静岡県は、文化財保護に建築士が携わる「文化財建造物監理士制度」を3年前に設けたが、第一期の登録者は浜松市の建築士が多い。浜松市民が何事にも積極的に向き合う良い例である。



【堀内秀哲さん】
建築士としてのご自身の能力を活かしながら地元中野町の地域づくりにも積極的に取り組んでいる。

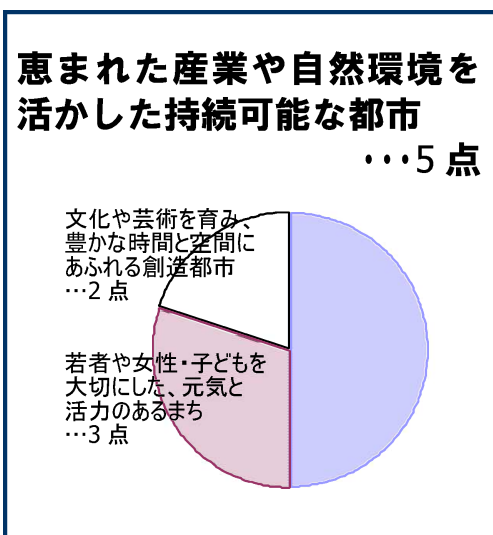
●古いものと新しいものが共存する社会に

創造都市を目指す浜松市だが、文化芸術面を考えたとき、伝統文化や文化財の保護への関心はまだ低い。明治から昭和初期の建造物は、デザインや文化財としての価値が高いだけでなく、産業や暮らしの近代化を支え現代社会の礎を築いてきた。歴史的な建造物は新しいまちづくりにも活用できる。中野町では、およそ100年前に木材交易で栄えた歴史の象徴として「伊豆石の蔵」をまちづくりに活かす取り組みをしている。

スクラップ&ビルドの消費型社会から脱し、歴史や文化に価値を見出し、古いものと新しいものが共存する、成熟したサステナブルな社会になって欲しい。

●まちがゆっくりと代謝しながら継続して行ってほしい

今後の超高齢社会を考えたとき、高齢者施策は当然必要だ。しかし同時に若者に対する施策も講じなければならない。中野町を考える会では学校と協力し、授業の中で子どもたちが地域の良さを知り、触れる取り組みをしている。



【浜松市への期待度グラフ】

自分の住むまちに愛着と誇りを持つことが、持続可能なまちを創る第一歩だ。時代によってまちの姿は変わっていく。しかし、先人の築いた過去の遺産を受け継ぎ、次世代へ伝え、地域の文化や風土を守っていく必要がある。まちがゆっくりと代謝しながら、継続して行ってほしい。

政令指定都市に移行する際の「環境と共生するクラスター型都市」のスローガンはとても魅力的であった。時代の変化により方向転換が必要だとしても、コンパクトでありながら、それぞれの地域特性を活かしたまちづくりを目指してほしい。